

令和4年度 厚生労働省科学研究費補助金

治療と仕事を両立する患者に対する継続的な支援の実態と方策の検討  
(22JA1002)

分担研究報告書

日本版 RTWSE-19  
(Return to self efficacy test) の開発

研究代表者

永田 昌子  
(産業医科大学 医学部 両立支援科学)



## 令和4年度 厚生労働省科学研究費補助金

### 治療と仕事を両立する患者に対する継続的な支援の実態と方策の検討

#### 日本版 RTWSE-19 (Return to self efficacy test) の開発

研究代表者 永田 昌子 (産業医科大学 医学部 両立支援科学 准教授)

研究分担者 立石清一郎(産業医科大学産業生態科学研究所災害産業保健センター教授)

研究分担者 江口 尚 (産業医科大学産業生態科学研究所産業精神保健学研究室教授)

研究分担者 原田有理沙(産業医科大学 医学部 両立支援科学)

#### 研究要旨:

当事者の病状や治療によって生じる業務遂行能力や労働意欲の変化と職場の変化に応じ、治療と仕事の両立支援が行われることが望まれる。当事者が支援のニーズを自覚し、支援を申し出ることが契機のひとつとなる。そのために、当事者が支援を申し出やすい条件と支援者が当事者に申出を促し支援を再開しやすい条件を本研究では注目している。本分担研究は、当事者が支援を申し出やすい条件として本人の職場復帰に対する自己効力感に着目した。

職場復帰に対する自己効力感(Return to work self efficacy)とは、職場復帰の結果に与える要因として注目されている因子である。職場復帰を成功させる要因としては、機能的状態や痛みなどの症状の因子は重要な要素であるが、それ以外にも心理社会的因子も重要とされ、心理社会的要因の1つとして職場復帰に対する自己効力感が挙げられている。Shawらが開発したRTWSE-19 (Return to work self efficacy test) は、オランダ語、ノルウェー語、韓国語などに翻訳され、職場復帰の成否の予測や、支援が必要な人のスクリーニングに用いられている。

我々はRTWSE-19の日本語版を作成し、医療機関や職場で継続的な支援が必要な人をスクリーニングするためのツールとしての開発を行った。はじめに、RTWSE-19の作成者であるWilliam Shawに許可を得て、逆翻訳をして確認をとり質問票を作成した。産業医科大学病院において、治療時に両立支援に関する面談を実施した89例から回答を得た。

2012年3月時点で89例から回答を得た。RTWSEの3因子の内部一貫性の指標であるCronbach's  $\alpha$ は、meeting job demand 0.9299, modifying job tasks 0.8873, communicating needs to others 0.9078であった。今後、さらに例数を積み重ね、信頼性と妥当性を検証する予定である。また、今後、医療機関や職場で継続的な支援が必要な人をスクリーニングするためのツールとしての活用の適否等を検討する。

#### 研究協力者

橋本 博興 (産業医科大学 医学部 両立支援科学 修練医)

渡邊 萌美 (産業医科大学病院 両立支援科 修練医)

古江 晃子 (産業医科大学病院 両立支援科 修練医)

石上 紋 (産業医科大学病院 両立支援科 保健師)  
細田 悦子 (産業医科大学病院 両立支援科 看護師)

## A. 目的

当事者の病状や治療によって生じる業務遂行能力や労働意欲の変化と職場の変化に応じ、治療と仕事の両立支援が行われることが望まれる。当事者が支援のニーズを自覚し、支援を申し出ることが契機のひとつとなる。そのために、当事者が支援を申し出やすい条件と支援者が当事者に申出を促し支援を再開しやすい条件を本研究では注目している。本分担研究は、当事者が支援を申し出やすい条件として本人の職場復帰に対する自己効力感に着目した。職場復帰に対する自己効力感(Return to work self efficacy)とは、職場復帰の結果に与える要因として注目されている因子である。職場復帰を成功させる要因としては、機能的状態や痛みなどの症状の因子は重要な要素であるが、それ以外にも心理社会的因子も重要とされ、心理社会的要因の1つとして職場復帰に対する自己効力感が挙げられている。Shawらが開発したRTWSE-19 (Return to work self efficacy test)は、オランダ語、ノルウェー語、韓国語などに翻訳され、職場復帰の成否の予測や、支援が必要な人のスクリーニングに用いられている。

RTWSE-19は、もともと職業性腰痛を持つ労働者の集団における質的研究結果から開発されたもので、その後、筋骨格系障害と精神障害の研究集団で検証され、28項目から19項目に絞られたものである。3つのサブスケール 1) meeting job demand, 2) modifying job tasks, 3) communicating needs to others に分け

られる。

我々はRTWSE-19の日本語版を作成し、医療機関や職場で継続的な支援が必要な人をスクリーニングするためのツールとしての開発を行った。

## B. 方法

### 1) RTWSE 日本語版の作成

はじめに、RTWSE-19の作成者であるWilliam Shawに許可を得た。次に翻訳者Aに日本語翻訳を依頼した。その後、研究者3名で意味内容を確認し、翻訳者Aと協議し修正を加え日本語版を作成した。その日本語版を翻訳者Bに依頼し英訳を行った。英訳したものを作成者に確認をとり、意味内容が誤訳されていないかを確認し、承諾を得た。

### 2) 調査の実施

産業医科大学病院において、治療時に両立支援に関する面談を実施した89例から回答を得たRTWSE-19と雇用形態や休業前の作業や所属している事業所の産業保健スタッフの有無等を尋ねた。

### 3) 分析

信頼性として、内的整合性である内部一貫性の指標であるCronbach's  $\alpha$ 係数を用いた。

### 4) 倫理的配慮

本研究は、産業医科大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## C. 結果

日本語版を作成した(添付1)。2012年3月時点で89例から回答を得た。89名は、男性58%女性42%、多かった年代で多かったのは40代23.6% 50代37.1% 60代16.9%であった。疾病はC:新生物が最も多く35.9%であった。事業所の規模は50人以上が65.1% 50人未満が35%であった。雇用形態は正社員61.8%、アルバイト・パート15.7%であった。休業前の作業は、対人サービスや顧客とのコミュニケーションを伴う作業70.8%、注意力の必要な作業66.3%、PC作業52.8%と続いた。産業保健スタッフは、「いる」「いない」「わからない」で尋ねており、産業医は「いる」38.2% 「いない」39.3% 「わからない」20.2%であった。RTWSEの3因子の内部一貫性の指標であるCronbach's  $\alpha$  係数は、meeting job demand 0.9299, modifying job tasks 0.8873, communicating needs to others 0.9078であった。

## D. 考察

William Shawらが開発した復職に対する自己効力感を評価する尺度RTWSE-19の日本語版を作成した。現時点で89名の結果が得られた。内部一貫性の指標であるCronbach's  $\alpha$  係数は高く、一定の信頼性の確保は確認できた。次年度は、対象者を増やし、信頼性と妥当性を検証する予定である。また、今後、医療機

関や職場で継続的な支援が必要な人をスクリーニングするためのツールとしての活用の適否等を検討する。

## F. 引用・参考文献

1. Shaw, W. S., Reme, S. E., Linton, S. J., Huang, Y. H., & Pransky, G. (2011). 3rd place, PREMUS<sup>1</sup> best paper competition: development of the return-to-work self-efficacy (RTWSE-19) questionnaire- psychometric properties and predictive validity. *Scandinavian journal of work, environment & health*, 109-119.
2. Momsen, A. M. H., Rosbjerg, R., Stapelfeldt, C. M., Lund, T., Jensen, C., Johansen, T., ... & Labriola, M. (2016). Cross-cultural adaptation and validation of the Danish version of the 19-item return-to-work self-efficacy (RTWSE-19) questionnaire. *Scandinavian journal of work, environment & health*, 338-345.
3. Lee, J. E., Yoo, S. B., & Leigh, J. H. (2020). Transcultural validation of the return-to-work self-efficacy scale in Korean patients with work-related injuries. *BMC public health*, 20, 1-10.
4. Skagseth, M., Fimland, M. S., NILSEN, T. I. L., & AASDAHL, L. (2021). Return-to-work self-efficacy

after occupational rehabilitation for musculoskeletal and common mental health disorders: Secondary outcomes of a randomized clinical trial. *Journal of Rehabilitation Medicine*, 53(1).

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

**H. 知的財産権の出願・登録状況：(予定を含む。)**

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

添付資料

年代	数	割合
10代	1	1.1
20代	1	1.1
30代	11	12.4
40代	21	23.6
50代	33	37.1
60代	15	16.9
70代	7	7.9
総計	89	100.0

性別	数	割合
男性	52	58.4
女性	37	41.6
総計	89	100.0

ICD10

C 新生物	32
D 血液および造血器の疾患ならびに	9
E 内分泌、栄養および代謝疾患	6
G 神経系の疾患	7
H 眼及び付属器	4
I 循環器の疾患	7
J 呼吸器系の疾患	2
K 消化器系の疾患	4
M 筋骨格系及び結合組織の疾患	14
N 腎尿路生殖器	4
	89

事業場の規模	数	割合
1000人以上	19	21.3
300-999人	14	15.7
50-299人	25	28.1
50人未満	24	27.0
わからない	7	7.9
総計	89	100.0

雇用形態	数	割合
正社員	55	61.8
アルバイト・パート	14	15.7
契約職員/嘱託社員	13	14.6
自営業	3	3.4
派遣社員	3	3.4
その他	1	1.1
総計	89	148.3

作業（複数選択可能）

	数	割合
対人サービスや顧客とのコミュニケーションを伴う作業	63	70.8
注意力の必要な作業	59	66.3
PC作業	47	52.8
事務作業	40	44.9
複数のことを同時に行う作業	36	40.4
身体への負荷が大きい作業	35	39.3

大きく体を使う作業	30	33.7
暑熱または寒冷な場所での作業	19	21.3
高所作業や重機・車の運転など本人および公衆に危険が及ぶ作業	19	21.3
指先を細かく使う作業	16	18.0
粉じんや有害物質を取り扱う作業	11	12.4

---

事業所内産業保健スタッフ

---

産業医		
いる	34	38.2
いない	35	39.3
わからない	18	20.2
産業看護職		
いる	11	12.4
いない	41	46.1
わからない	33	37.1

---